

忠臣蔵のあらすじ

第一部「ことの発端」起

1701 年、浅野内匠頭は勅使供応役（天皇の使者を江戸城でもてなす係）の任務を受けており、高家（儀式、典礼を司る役職）筆頭の吉良上野介から礼儀作法の指導や指示を受けながら、天皇の使者をもてなしました。しかし吉良上野介は指示だけでなく、様々な嫌がらせを浅野内匠頭にしました。（例：ことあるごとに浅野を「田舎大名」とののしり（ちなみに浅野の領地は播磨の国でしたが、浅野内匠頭は鉄砲洲という東京・中央区湊で生まれ育った江戸っ子でした。）、勅使供応の直前に浅野が用意したインテリア（墨絵の屏風）にダメ出しをしたうえで扇子で真ん中から引き裂いたり、その屏風を倒したり、用意する料理は精進料理だと嘘情報を流して浅野のケータリングを台無しにしたり。）

我慢に我慢を重ねていた浅野内匠頭でしたがついに堪忍袋の緒が切れ、3 月 14 日江戸城の松之廊下で吉良上野介を斬り付けてしまいました。

当時の決まりでは喧嘩両成敗が基本でしたが、徳川綱吉将軍は浅野内匠頭を即日切腹にし、赤穂藩を取潰した一方、吉良上野介を罰することは全くしませんでした

第二部「浅野家藩士の反応」承

赤穂浅野家では、片手落ちの綱吉の裁定に対し、『素直に従い、裁定の修正を運動する』、『幕府に盾突き戦争をする』、『全員で切腹をし、反抗の意思を表す』などの議論がありました。そして最後は『素直に従うが、喧嘩両成敗を求める』ということに決め、赤穂城を明け渡し、浅野家の再興と上野介への処罰を求めましたが、幕府の裁定は覆されませんでした。

浅野家筆頭家老の大石内蔵助は『吉良上野介を討取り、浅野内匠頭の無念を晴らす』ことにし、本気で討ち入りたいと考えている藩士だけを選抜します。

お金もなく毎日の生活も困窮するなか、様々な誘惑に負けることなく敵討ちの意思を持ち続けることができた義士は 47 人でした。

※赤穂城は、現在の兵庫県南西部、岡山県との県境付近に位置するところになります。

第三部「討入り」転

浅野内匠頭切腹から 1 年 10 ヶ月後の 1702 年 12 月 14 日夜、吉良上野介の在宅を確信した赤穂義士は吉良邸へ討入りました。正確な人数は不明ながら、吉良邸には 100 人以上の護衛のための侍がいたと言われています。義士たちは山鹿流の兵法に従い、表門と裏門から同時に攻入りそして 3 人一組（スリーマンセル）となり吉良上野介を探しました。夜明け前になって物置にかくれ潜んでいた吉良上野介を見つけ出し、敵討ちに成功しました。

そして赤穂義士は泉岳寺にある浅野内匠頭の墓前に吉良上野介の首を供え、討ち入りが成功したことを報告しました。

第四部「その後」結

幕府は、寺坂吉右衛門を除く 46 人の義士を細川、水野、松平、毛利の 4 つの大名に預け、助命か打首か、悩めます。将軍綱吉も助命に傾いていましたが、討入から約 2 か月後、1703 年 2 月 4 日、赤穂義士は切腹しました。そして、義士たちの希望に従い、泉岳寺にある浅野内匠頭の墓の近くに埋葬されました。